鴨井 修平（2020）『言語記述論集』12：223-240

西日本諸方言におけるアスペクト体系のバリエーション

ーYORU・TORU・TERU の記述を中心にー

鴨井 修平
同志社大学大学院文化情報学研究科/同志社大学言語生態科学研究センター

1. はじめに

本稿は，統一的枠組みに基づいて記述した 12 地点の方言データより，西日本諸方言におけるアスペクト体系のタイプ分けを提案するものである。

標準語のテイルに相当するアスペクト形式として，東日本側には TERU(-*ter*-)という 1 形式，西日本側には，YORU(-*jor*-)，TORU(-*tor*-)，TERU という 3 形式が分布している（『方言文法全国地図 第 198 図』（国立国語研究所 1999））[1]。

図 1　現在進行中の局面における使用形式の分布[2]

ある命題が進行中あるいは終了後の局面にあることを標示する際，東日本諸方言は TERU の 1 形式を用いるという点で，テイルの 1 形式を用いる標準語と同様であるの

[1] -ヨルと-トルは音声バリエーションが豊富な形式であり，例えばヨル型には[-joɾu], [-joːɾu], [-joː], [-juː]など，トル型には[-toɾu], [-tɕoɾu], [-toː], [-tɕuː]などがある（『方言文法全国地図』（国立国語研究所 1999））。本稿では，両形式の意味機能を方言間で対照する便宜上，ヨル型はすべて YORU，トル型はすべて TORU と表記し，それに伴い-テルも TERU と表記する。

[2] 筆者による分割線の右側（東日本側）は TERU の 1 形式，左側（西日本側）は YORU，TORU，TERU の 3 形式がそれぞれ分布している。

に対し，西日本諸方言は YORU と TORU の 2 形式を用いてアスペクトを区別するという特徴を持つ。YORU が動詞連用形-*e/i* と存在動詞-*or-u* から形成された形式であるのに対し，TORU は動詞テ形-*e/i-te* と存在動詞-*or-u* から形成された形式である。また，TERU は動詞テ形-*e/i-te* と存在動詞-*ir-u* から形成された形式である。

従来の研究では，主に進行相(progressive)を標示する YORU と結果相(resultative)を標示する TORU のアスペクト対立を前提として，両形式が進行相を標示するというアスペクト機能の重複が問題視されてきた（e.g. 工藤 1999, 丹羽 2005, 津田 2014）[3]。よって，個別方言における YORU と TORU が標示する意味や，両形式の意味拡張については数多くの報告があるが，各方言のアスペクト体系について，統一的枠組みに基づいた対照研究はほとんど行われていない。

本稿では，YORU，TORU，TERU を中心に，西日本諸方言におけるアスペクト体系をタイプ別に記述し，現状観察される 5 タイプのアスペクト体系の比較対照により，西日本諸方言のアスペクト体系におけるバリエーションの在り方について考察する。

2. 研究方法

本節では，アスペクト体系のタイプ分けを行うための方法論を示す。従来の個別方言における研究から分かるように，YORU，TORU，TERU の生起条件や標示する意味には各方言で差異がある[4]。よって，各方言のアスペクト体系を比較対照するためには，統一的枠組みに基づいて記述されたアスペクト体系を準備する必要がある。

2.1. 統一的枠組みの設定

本研究では，各方言のアスペクト体系を統一的枠組みに基づいて網羅的に記述するために，命題の時間構造を 2 種類設定する。まず，図 2 に示すように，進行相を持つ命題の時間構造は，開始兆候点(signal of beginning=sb)，開始点(beginning=b)，終了点(ending=e)，結果終了点(result ending=re)という 4 つの参照点と，将然相(prospective)，進行相，結果相という 3 つのアスペクトから構成される。例えば，「A が魚を食べる」という命題は，時間(time=t)の経過に伴い，食卓に着く（将然相）>魚を咀嚼する（進行相）>魚の骨が残る（結果相）のようなプロセスを経る。このような時間構造を持つ命題を命題 X とする[5]。

---

[3] YORU と TORU の両形式が進行相を標示する現象については，中和（工藤 1995），統合（井上 1998），併用（津田 2014）などと呼ばれているが，本研究では，1 つの意味に対して 2 つの形式が重なって対応しているということを強調するため，当該の現象を「重複」と呼ぶ。

[4] 例えば，愛媛県宇和島方言では，アスペクト形式である YORU と TORU は非結果相（将然相と進行相）と結果相の対立を区別するが（工藤 1995），京阪方言では，YORU は卑語であり，アスペクト形式である TORU と TERU は中立待遇と下位待遇の対立を区別する（井上 1998）。

[5] 金田一(1950)や Vendler(1967)の動詞分類から見れば，「走る」，「食べる」などの継続動詞(activities)や「作る」，「焼く」などの達成動詞(accomplishments)が命題 X の述語となる。

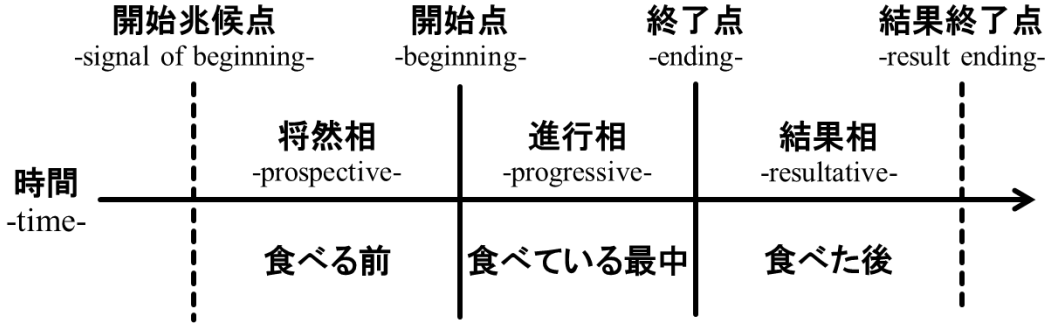

図 2　命題 X の時間構造

一方，図 3 に示すように，進行相を持たない命題の時間構造は，開始兆候点，開始/終了点，結果終了点という 3 つの参照点と，将然相，結果相という 2 つのアスペクトから構成される。例えば，「ロウソクの火が消える」という命題は，時間の経過に伴い，火が段々と弱くなる（将然相）>火が消え，細い煙が上がる（結果相）のようなプロセスを経る。このような時間構造を持つ命題を命題 Y とする[6]。

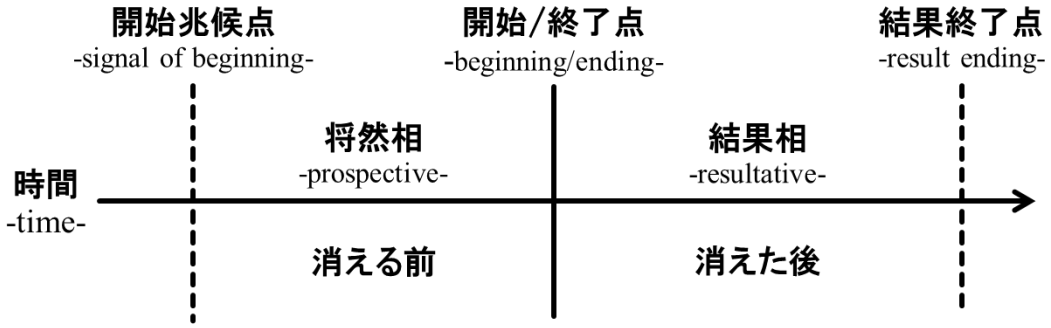

図 3　命題 Y の時間構造

本研究では，前述の命題 X と命題 Y において，YORU，TORU，TERU がどのアスペクト上に生起し得るかという統一的枠組みに基づいて各方言のアスペクト体系を記述し，タイプ分けを行った。本稿では，各方言のアスペクト体系の相違点が顕著に観察された命題 X における調査結果のみを報告する。

さらに本研究では，次の 2 つの仮説に基づき，最大限成立し得るアスペクト体系の 11 タイプを想定しておく。

[6] 金田一(1950)や Vendler(1967)の動詞分類から見れば，「死ぬ」，「消える」などの瞬間動詞(achievements)が命題 Y の述語となる。また，「ある」，「いる」などの状態動詞(states)を述語とする命題は，命題 X，命題 Y のような時間構造を持たない命題とし，本稿では，アスペクト形式との共起関係について割愛する。

[1] 命題 X の時間構造は，将然相>進行相>結果相という意味の連続によって成立している。よって，1 形式が連続的な意味（将然相と進行相もしくは進行相と結果相）を担うということはあり得るが，非連続的な意味（将然相と結果相）を担うということはあり得ないと仮定する。

[2] 従来の研究において，将然相，進行相，結果相をそれぞれ異なる形式で標示する方言は報告されていない。よって，アスペクト上において対立し得る形式は 2 形式であると仮定する。

前述の仮説に基づけば，次に示す合計 11 タイプのアスペクト体系が想定される。ここでは YORU，TORU，TERU という特定の形式を考えず，アスペクト上において対立し得る 2 形式を a，b とし，対照的枠組みを設定する。まずは，形式 a と形式 b が重複しないタイプ 1-3 を示す。

タイプ 1

将然相	進行相	結果相
a	a	a

タイプ 2

将然相	進行相	結果相
a	a	b

タイプ 3

将然相	進行相	結果相
a	b	b

次に，形式 a と形式 b が 1 つのアスペクト上で重複するタイプ 4-6 を示す。

タイプ 4

将然相	進行相	結果相
a	a	a/b

タイプ 5

将然相	進行相	結果相
a	a/b	b

タイプ 6

将然相	進行相	結果相
a/b	b	b

さらに，形式 a と形式 b が 2 つ以上のアスペクト上で重複するタイプ 7-9 を示す。

タイプ 7

将然相	進行相	結果相
a	a/b	a/b

タイプ 8

将然相	進行相	結果相
a/b	a/b	b

タイプ 9

将然相	進行相	結果相
a/b	a/b	a/b

最後に，1 形式が非連続的な意味を担うという意味で仮説[1]の反例となるタイプ 10 と，a，b，c の 3 形式を用いてアスペクトを区別するという意味で仮説[2]の反例となるタイプ 11 を示す。

タイプ 10

将然相	進行相	結果相
a	b	a

タイプ 11

将然相	進行相	結果相
a	b	c

以上の対照的枠組みに基づいて各方言のアスペクト体系を観察する。本稿において報告可能な各方言のアスペクト体系は，前述の 11 タイプのうち，タイプ 2，3，5，8 の 4 タイプの体系を実証している。これについては，第 3 節で詳細に報告する。

2.2. 調査概要

本研究における調査は，『方言文法全国地図』（国立国語研究所 1999）の分布と予備調査の結果を参考に，YORU，TORU，TERU の分布域に位置する次の 12 方言を対象に実施した。これにより，西日本諸方言内におけるアスペクト体系の地理的バリエーションを捉えることが可能であると考える。

［中部地方］岐阜県美濃方言，岐阜県飛騨方言
［近畿地方］京都府京都市方言，兵庫県神戸市方言
　　滋賀県_湖東方言，湖西方言，湖南方言，湖北方言
［中国地方］岡山県備前方言
［四国地方］高知県土佐方言
［九州地方］熊本県北部方言，佐賀県鳥栖市方言

また本研究では，各方言のアスペクト体系を統一的枠組みに基づいて網羅的に記述するために，次の基準を満たす若年層（18-39 歳），中年層（40-69 歳），高年層（70 歳以上）の話者を方言 X のインフォーマントとし，方言 X につき各年齢層から 5 名ずつ

（計 15 名）のインフォーマントに対して，同様の質問項目を用いてインタビュー調査を行った。これにより，個別方言内におけるアスペクト体系の通時的バリエーションを捉えることが可能であると考える。

[1] 1～18 歳までを調査対象の方言区域内で生活した
[2] 方言区域外における外住歴が合計 5 年未満である

インタビュー調査では，各アスペクトと対応する個々の命題を合計 40 例ほど提示し，その命題において使用する形式を［-YORU，-TORU，-TERU，その他］の中から複数選択させ回答を得た。提示する命題の述語となる動詞は，金田一 (1950)や Vendler (1967)の動詞分類を参考に選定している。また，個々の命題においてニュートラルとして使用する形式やアスペクト以外の意味が含意されているか等についても詳細な回答を得た。インタビュー調査に用いた将然相，進行相，結果相に対応する命題の例を次に示す[7]。

［将然］運動場へ行くと，スタートラインに立ち，手首足首を回す走る直前の A がいた
［選択肢］a. A が，走りヨル／b. A が，走っトル／c. A が，走っテル／d. その他：

［進行］運動場へ行くと，走っている最中の A がいた
［選択肢］a. A が，走りヨル／b. A が，走っトル／c. A が，走っテル／d. その他：

［結果］運動場へ行くと，既に 10 周走り終えた A が休憩していた
［選択肢］a. A が，走りヨル／b. A が，走っトル／c. A が，走っテル／d. その他：

また本研究では，図 4 に示すように，方言 X の全体像（母集団）は，方言 X を母語とする全年齢層の話者（標本）によって特徴づけられると考える[8]。よって各方言のアスペクト体系の全体像を把握するためには，伝統方言の話者である高年層の方言データのみならず，中年層，若年層の方言データも共に分析対象とする必要がある。

[7] 調査時間は 1 件につき約 3 時間程度である。調査時期はいずれも 2015-2020 年の間であるが，各方言に対して一定の調査期間を設けたわけではないため詳細を割愛する。また調査の実施場所についても多岐にわたるため詳細を割愛する。
[8] 母集団と標本は集合と部分集合の関係にあり，標本には母集団の性質が反映されている。本研究における方言データの収集方法は，母集団から抽出した標本を分析することで母集団の性質を明らかにするという統計学の方法論（標本調査）より着想を得ている。

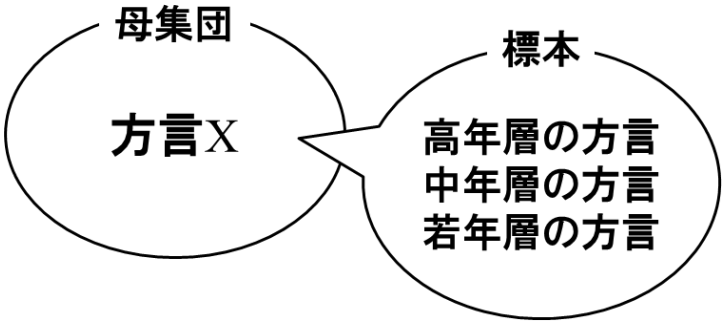

図 4　方言 X と年齢層の関係

3. アスペクト体系の各記述

本節では，前述の方法論に基づいて収集した 12 の方言データの分析結果より，命題 X を中心としたアスペクト体系をタイプ別に提示する。例えば，方言 α のアスペクト体系が方言 β のアスペクト体系と同様である場合，方言 α と方言 β は Z タイプのアスペクト体系に属しているということである。各形式の標示するアスペクトについて，年齢層による差異が観察された場合は，補足的にその旨を報告する。

3.1. アスペクト体系 A タイプ

本節では，高知県土佐方言のデータより，アスペクト体系 A タイプを提示する。図 5 に示すように，本稿では，命題 X における非結果相を YORU で標示し，結果相を TORU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを A タイプと呼ぶ。

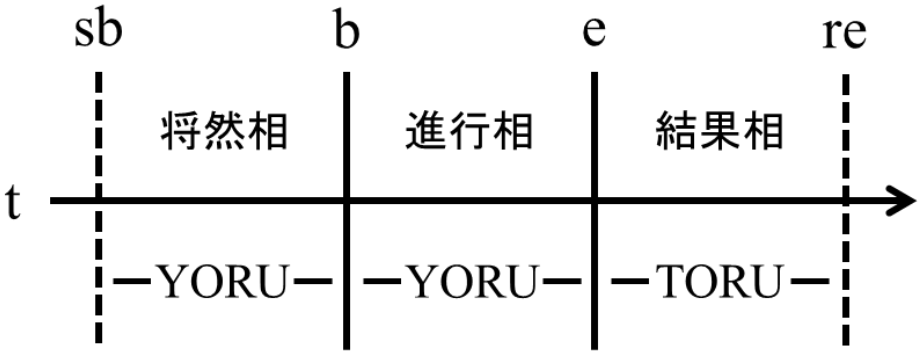

図 5　アスペクト体系 A タイプ

図 5 より，A タイプの方言では，命題 X における将然相と進行相に YORU という 1 形式，結果相に TORU という 1 形式が対応しているため，2 形式の形態的な対立が非結果相と結果相のアスペクト対立に対応する。

次に，高知県土佐方言における用例を示す。(1)に示すように，YORU(-juː)と TORU(-tɕuː)が命題 X に生起する場合，YORU は将然相，進行相を標示し，TORU は結

果相を標示するという意味で，非結果相と結果相における両形式のアスペクト機能の対立が観察される。

(1) a. 運動場へ行くと，スタートラインに立ち，手首足首を回す走る直前の A がいた
　A が　走りユー/*走っチュー
　b. 運動場へ行くと，走っている最中の A がいた
　A が　走りユー/*走っチュー
　c. 運動場へ行くと，既に 10 周走り終えた A が休憩していた
　A が　走っチュー/*走りユー

「A が運動場を走る」という命題において，(1a)は，A が走る直前であることを標示する場合には YORU が選択されるということを示している。同様に(1b)は，A が走っている最中であることを標示する場合には YORU が選択されるということを示している。一方(1c)は，A が走り終えたことを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。

最後に，命題 X における使用形式について，年齢層による大きな差異は観察されなかったが，(1a)においては，若年層では自然な表現として YORU を使用するのに対し，中年層，高年層では YORU を使用することに対する許容度が少し下がるという現象が観察された。

前述の高知県土佐方言が示す事実より，西日本諸方言には，図 5 に示すような A タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能な A タイプの方言は，現状では高知県土佐方言のみであるが，先行研究の記述を参考にすれば，他にも山口県周防大島方言（五十川 1984，工藤 1999）が挙げられ，西日本諸方言の中でも明確なアスペクト機能の対立を持つごく少数の方言がこの A タイプに所属すると考えられる。また，前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち，タイプ 2 の体系が本事実により実証される。

3.2. アスペクト体系 B タイプ

本節では，兵庫県神戸市方言のデータを中心に，アスペクト体系 B タイプを提示する。図 6 に示すように，本稿では，命題 X における非結果相を YORU で標示し，進行相と結果相を TORU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを B タイプと呼ぶ。

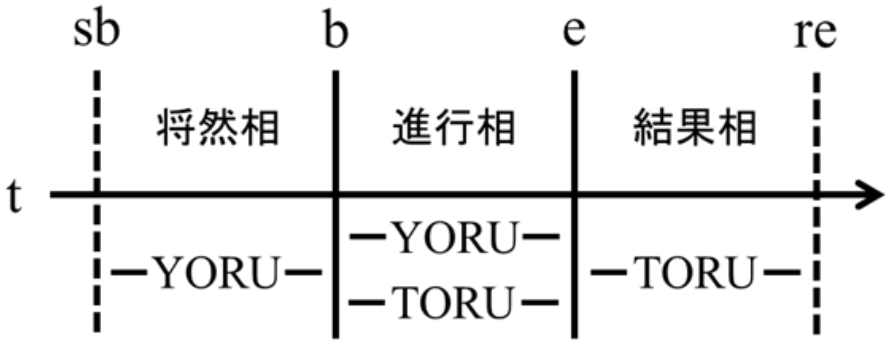

図 6　アスペクト体系 B タイプ

図 6 より，B タイプの方言では，命題 X における将然相に YORU という 1 形式，進行相に YORU，TORU という 2 形式，結果相に TORU という 1 形式が対応しているため，進行相においては 2 形式のアスペクト機能が重複する。

次に，兵庫県神戸市方言における用例を示す。(2)に示すように，YORU(-jo:)と TORU(-to:)が命題 X に生起する場合，YORU は将然相，進行相を標示し，TORU は進行相，結果相を標示するという意味で，進行相における両形式のアスペクト機能の重複が観察される。

(2) a. 運動場へ行くと，スタートラインに立ち，手首足首を回す走る直前の A がいた
　A が　走りヨー/*走っトー
　b. 運動場へ行くと，走っている最中の A がいた
　A が　走りヨー/走っトー
　c. 運動場へ行くと，既に 10 周走り終えた A が休憩していた
　A が　走っトー/*走りヨー

「A が運動場を走る」という命題において，(2a)は，A が走る直前であることを標示する場合には YORU が選択されるということを示している。しかし(2b)は，A が走っている最中であることを標示する場合には YORU と TORU の両形式が選択され得るということを示している。一方(2c)は，A が走り終えたことを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。

最後に，命題 X における使用形式について，年齢層による大きな差異は観察されなかった。また(2b)においては，TORU の方がより使用頻度が高いという回答が複数得られた。

前述の兵庫県神戸市方言が示す事実より，西日本諸方言には，図 6 に示すような B タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能な B タイプの方言は，現状では兵庫県神戸市方言の他に，熊本県北部方言，佐賀県

鳥栖市方言，岐阜県飛騨方言である。また，先行研究の記述を参考にすれば，愛媛県宇和島方言（工藤 1995），福岡県福岡市方言（平塚 2012），山口県山口市方言（津田 2014）など，多くの西日本諸方言がこの B タイプに所属すると考えられる。また，前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち，タイプ 5 の体系が本事実により実証される。

3.3. アスペクト体系 C タイプ

本節では，岡山県備前方言のデータより，アスペクト体系 C タイプを提示する[9]。図 7 に示すように，本稿では，命題 X における非結果相を YORU と TORU で標示し，結果相を TORU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを C タイプと呼ぶ。

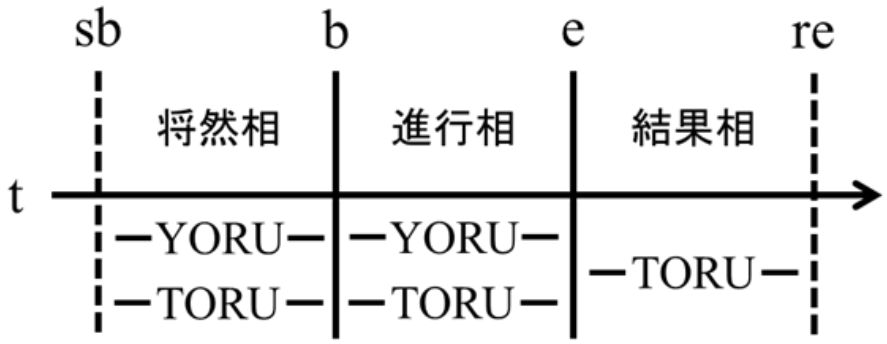

図 7　アスペクト体系 C タイプ

図 7 より，C タイプの方言では，命題 X における将然相に YORU，TORU という 2 形式，進行相に YORU，TORU という 2 形式，結果相に TORU という 1 形式が対応しているため，将然相，進行相においては 2 形式のアスペクト機能が重複する。

次に，岡山県備前方言における用例を示す。(3)に示すように，YORU(-joːɾu)と TORU(-toɾu)が命題 X に生起する場合，YORU は将然相，進行相を標示し，TORU は将然相，進行相，結果相を標示するという意味で，将然相，進行相における両形式のアスペクト機能の重複が観察される。

[9] 岡山県備前方言は筆者の母語である。客観的に岡山県備前方言を記述するため，インフォーマントに筆者は含まれていないが，本稿において報告する岡山県備前方言の事実と筆者の内省はすべて一致するものである。岡山県備前方言の詳細については鴨井 (2017)を参照されたい。

(3) a. 運動場へ行くと，スタートラインに立ち，手首足首を回す走る直前の A がいた
　A が　走りョール/走っトル
　b. 運動場へ行くと，走っている最中の A がいた
　A が　走りョール/走っトル
　c. 運動場へ行くと，既に 10 周走り終えた A が休憩していた
　A が　走っトル/*走りョール

「A が運動場を走る」という命題において，(3a)は，A が走る直前であることを標示する場合には YORU と TORU の両形式が選択され得るということを示している。同様に(3b)は，A が走っている最中であることを標示する場合には YORU と TORU の両形式が選択され得るということを示している。一方(3c)は，A が走り終えたことを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。

最後に，命題 X における使用形式について，(3a)，(3b)では，YORU の方がより使用頻度が高いという回答が複数得られた。また，(3a)における TORU の使用は若年層では顕著に観察されたが，高年層では一切観察されなかった。一方，(3b)における TORU の使用は非高年層（若年層と中年層）で顕著に観察され，高年層では TORU を使用することに対する許容度が少し下がるという揺れが観察された。つまり，岡山県備前方言では，非高年層のアスペクト体系 C タイプと図 8 に示すような高年層のアスペクト体系 C’タイプが共存しているということであり，C’タイプ>C タイプへの通時的変化が明確に観察される。

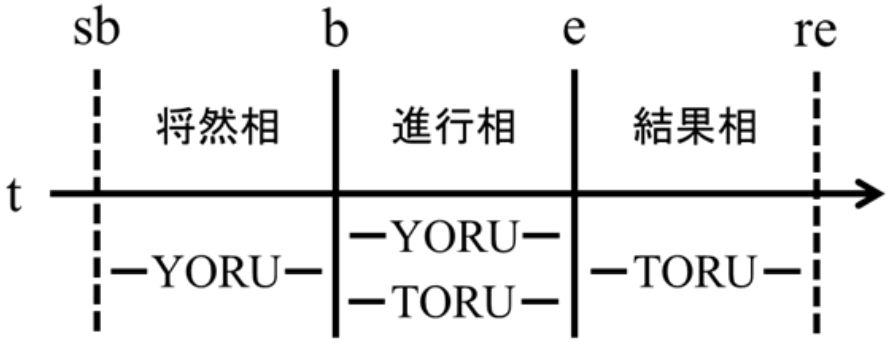

図 8　アスペクト体系 C’タイプ

さらに，岡山県備前方言の高年層における用例を示す。

(4) a. 運動場へ行くと，スタートラインに立ち，手首足首を回す走る直前の A がいた
　A が　走りョール/*走っトル
　b. 運動場へ行くと，走っている最中の A がいた
　A が　走りョール/走っトル
　c. 運動場へ行くと，既に 10 周走り終えた A が休憩していた
　A が　走っトル/*走りョール

図 8 及び(4)より，C’タイプは前述の B タイプと同様のアスペクト体系であることが分かる。よって詳細は割愛するが，C’タイプと B タイプの関係性については，各アスペクト体系を比較対照する第 4 節において後述する。

前述の岡山県備前方言が示す事実より，西日本諸方言には，図 7 に示すような C タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本稿において報告可能な C タイプの方言は，現状では岡山県備前方言のみであり，従来の研究においてもこの C タイプに所属するような方言は報告されていない[10]。また，前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち，タイプ 8 の体系が本事実により実証される。

3.4. アスペクト体系 D タイプ

本節では，京都府京都市方言のデータを中心に，アスペクト体系 D タイプを提示する。図 9 に示すように，本稿では，命題 X における将然相を YORU，動詞現在形-ルで標示し，進行相，結果相を TORU，TERU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを D タイプと呼ぶ[11]。

[10] 将然相における TORU の使用について，命題 X の将然相では観察されるが，命題 Y の将然相では観察されない現象である。この事実より，岡山県備前方言では，将然相と結果相の間には明確な参照点をとるが，将然相と進行相の間には明確な参照点をとらないということが示唆される。しかし本稿では，これについての詳細な議論を割愛し，A タイプ，B タイプの方言では，命題 X の将然相における TORU の使用が非文法的であると見なされるのに対し，岡山県備前方言では文法的であると見なされるという相違点が生じた事実を重視する。

[11] 本稿の議論の中心は YORU，TORU，TERU であるが，A-C タイプの方言は，将然相における主な使用形式が YORU であるのに対し，D タイプと後述する E タイプの方言は，将然相における主な使用形式が標準語と同様，動詞現在形-ルであるという特徴を持つため，D，E タイプにおいては YORU，TORU，TERU に-ルを加えてアスペクト体系を記述する。

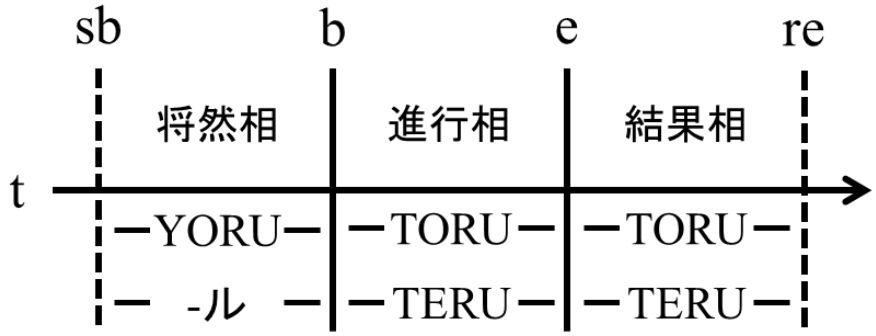

図 9　アスペクト体系 D タイプ

図 9 より，D タイプの方言では，命題 X における将然相に YORU，-ルという 2 形式，進行相に TORU，TERU という 2 形式，結果相に TORU，TERU という 2 形式が対応しているため，いずれのアスペクトにおいても 2 形式のアスペクト機能が重複する。

次に，京都府京都市方言における用例を示す。(5)に示すように，YORU(-joɾu)，-ル，TORU(-toɾu)，TERU(-teɾu)が命題 X に生起する場合，YORU，-ルは将然相を標示し，TORU，TERU は進行相，結果相を標示するという意味で，いずれのアスペクトにおいても 2 形式のアスペクト機能の重複が観察される。

(5) a. 運動場へ行くと，スタートラインに立ち，手首足首を回す走る直前の A がいた
　A が　走る/走りヨル/*走っトル/*走っテル
　b. 運動場へ行くと，走っている最中の A がいた
　A が　走っトル/走っテル/*走る/*走りヨル
　c. 運動場へ行くと，既に 10 周走り終えた A が休憩していた
　A が　走っトル/走っテル/*走る/*走りヨル

「A が運動場を走る」という命題において，(5a)は，A が走る直前であることを標示する場合には YORU と-ルの両形式が選択され得るということを示している。一方，(5b)は，A が走っている最中であることを標示する場合には TORU と TERU の両形式が選択され得るということを示している。同様に(5c)は，A が走り終えたことを標示する場合には TORU と TERU の両形式が選択され得るということを示している。

最後に，命題 X における使用形式について，年齢層による大きな差異は観察されなかった。また(5a)では，アスペクトから見れば-ル，YORU のいずれも文法的であるが，話し手の態度から見れば-ルはニュートラル，YORU は不満や軽蔑を表すという現象が観察された。さらに，(5b)，(5c)では，アスペクトから見れば TORU，TERU のいずれも文法的であるが，話し手の態度から見れば TERU はニュートラル，TORU は不

満や軽蔑を表すという現象が観察された[12]。

前述の京都府京都市方言が示す事実より，西日本諸方言には，図 9 に示すような D タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能な D タイプの方言は，現状では京都府京都市方言の他に，滋賀県湖東方言，滋賀県湖西方言，滋賀県湖南方言，滋賀県湖北方言である。また，井上 (1998)の記述を参考にすれば，西日本諸方言の中でも近畿方言の多くがこの D タイプに所属すると考えられる[13]。また，前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち，タイプ 3 の体系が本事実により実証される。

3.5. アスペクト体系 E タイプ

本節では，岐阜県美濃方言のデータを中心に，アスペクト体系 E タイプを提示する。図 10 に示すように，本稿では，命題 X における将然相を動詞現在形-ルで標示し，進行相，結果相を TORU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを E タイプと呼ぶ。

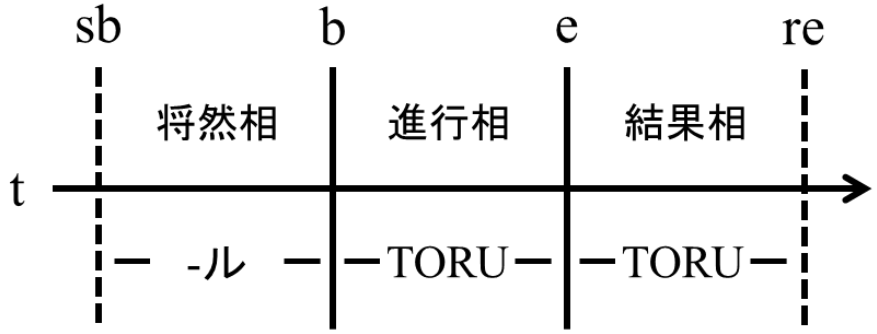

図 10　アスペクト体系 E タイプ

[12] アスペクト形式がアスペクト以外の意味を担う現象については，井上 (1998)や工藤 (2014)でも報告されており，本調査においても，京都府京都市方言を含め，いくつかの個別方言でこの現象を観察した。本稿ではアスペクトのみを対象として議論を進めるが，この現象の解明は本研究の今後の課題である。

[13] 井上 (1998)や工藤 (2014)の指摘によれば，近畿方言で観察される YORU は，アスペクトを標示するためのアスペクト形式ではなく，話し手の卑罵的態度を標示するための下位待遇形式である。しかし，YORU と待遇的に対立する上位待遇形式の-ハルがアスペクトに関わらず生起可能であるのに対し（e.g. 走らハル，走ってハル），YORU は進行相と結果相には生起できないという制約がかかっている（e.g. *走ってヨル）。この事実より，近畿方言の YORU を完全な待遇形式と見なすのではなく，あくまで将然相を標示する際に使用される形式として分析し，タイプ D のようなアスペクト体系を仮定する必要があると考える。また本稿では，非過去形を中心に議論しているが，YORU のタ形である-ヨッタが，A-C タイプの方言では「～していた/～するところだった」という意味を標示するのに対し，D タイプの方言では「～した（～しやがった）」という意味を標示するという点で大きな相違点があるため，タ形を含む議論は本研究の今後の課題である。

図 10 より，E タイプの方言では，命題 X における将然相に-ルという 1 形式，進行相に TORU という 1 形式，結果相に TORU という 1 形式が対応する。

次に，岐阜県美濃方言における用例を示す。(6)に示すように，-ル，TORU(-toɾu)が命題 X に生起する場合，-ルは将然相を標示し，TORU は進行相，結果相を標示するという意味で，将然相と非将然相（進行相と結果相）における両形式のアスペクト機能の対立が観察される。

(6) a. 運動場へ行くと，スタートラインに立ち，手首足首を回す走る直前の A がいた
　A が　走る/*走っトル
　b. 運動場へ行くと，走っている最中の A がいた
　A が　走っトル/*走る
　c. 運動場へ行くと，既に 10 周走り終えた A が休憩していた
　A が　走っトル/*走る

「A が運動場を走る」という命題において，(6a)は，A が走る直前であることを標示する場合には-ルが選択されるということを示している。一方，(6b)は，A が走っている最中であることを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。同様に(6c)は，A が走り終えたことを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。

最後に，命題 X における使用形式について，年齢層による大きな差異は観察されなかった。

前述の岐阜県美濃方言が示す事実より，西日本諸方言には，図 10 に示すような E タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能な E タイプの方言は，現状では岐阜県美濃方言のみであるが，先行研究の記述を参考にすれば，三重県鈴鹿市白子方言（佐藤 1994），石川県石川郡美川町方言（江端 1994）など，近畿地方以東のいくつかの方言がこの E タイプに所属すると考えられる[14]。また，京都府京都市方言の事実と同様，前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち，タイプ 3 の体系が本事実によっても実証される。

[14] 工藤 (2014)の記述を参考にすれば，島根県平田方言におけるアスペクト形式は TORU のみであるため，YORU を持たない E タイプの方言は近畿地方以西でも観察される可能性がある。これについては，島根方言を含め，引き続き本研究の研究方法に基づいて調査を行い，アスペクト体系を記述する。また，太田 (1994)の記述を参考にすれば，愛知県名古屋市方言におけるアスペクト形式では，基本的である TORU に加え TERU も使用されているため，図 9 の進行相と結果相に TERU を加えたタイプの方言も存在することが考えられる。これについても，愛知方言を含め，引き続き本研究の研究方法に基づいて調査を行い，アスペクト体系を記述する。

4. アスペクト体系の比較対照

本節では，統一的枠組みに基づいて記述した 5 タイプのアスペクト体系の比較対照より，西日本諸方言のバリエーションを考察する。5 タイプ全てを図 11 にまとめる。

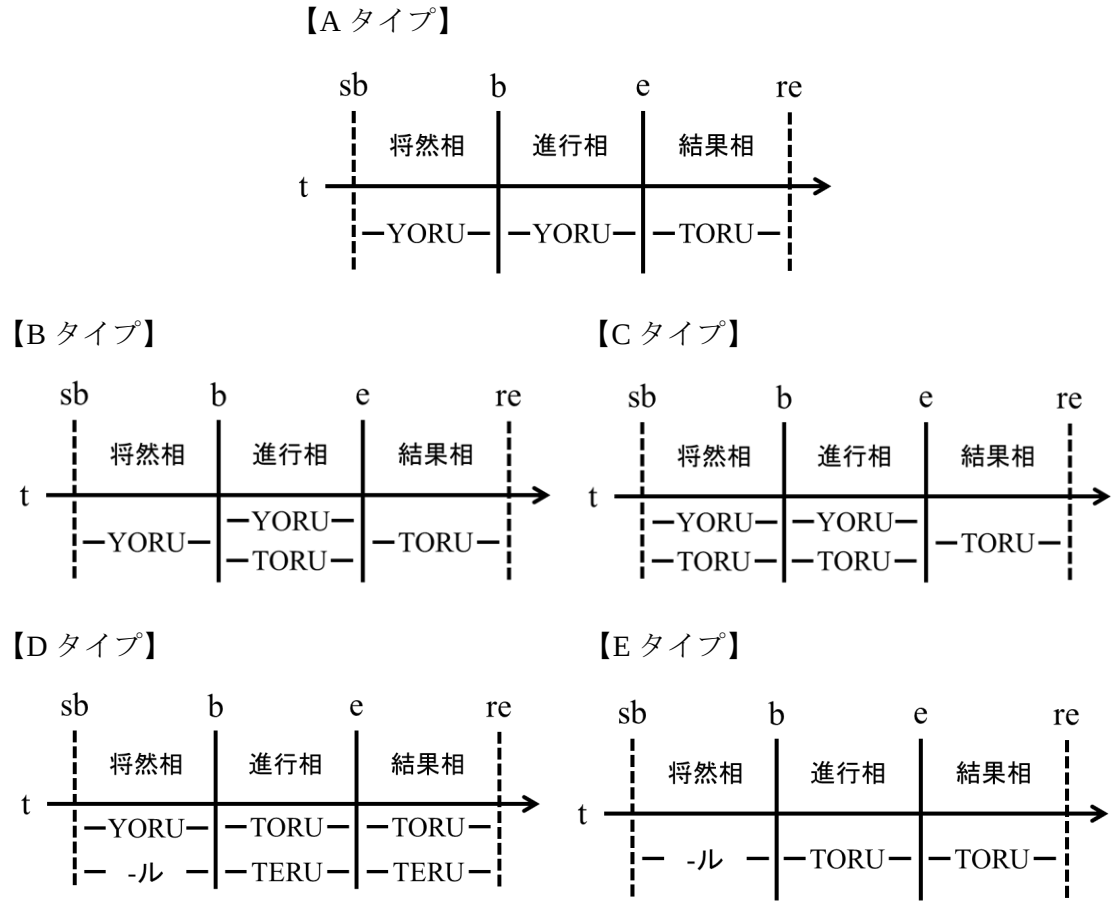

図 11　西日本諸方言における 5 タイプのアスペクト体系

前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系より，形式 a として YORU，形式 b として TORU を持つタイプのアスペクト体系に着目すれば，次のような通時的変化のプロセスを提案することができる。

図 11 より，実際に観察された 5 タイプのアスペクト体系には，命題 X における結果相を TORU で標示するという共通点が観察される。この事実より，西日本諸方言における TORU という形式は，元来，A タイプの方言のように，結果相を標示するためのアスペクト形式であったということが推測される。このことは，形態素の*-te-*を介する形式（e.g. テアル，テシマウ）が結果の局面を標示することからも推測できる。

また図 11 より，TORU が元来は結果相を標示するためのアスペクト形式であったと仮定すると，A タイプの方言を通時的変化の起点に，TORU は結果相>進行相を標示するように意味拡張するという一方向性が観察される。この事実より，多くの西日本諸

方言が所属するBタイプの方言は，少なくともAタイプ>Bタイプの体系変化を遂げてきたと考えられる。同様に，TORUの一方向的な意味拡張から考えれば，Cタイプの方言は，Aタイプ>Bタイプ>Cタイプの体系変化を遂げてきたと考えられる[15]。このことは，A，B，Cタイプの方言におけるYORUは，非結果相は標示するが，結果相は標示しないという共通点を持っていることからも支持される。

最後に図11より，5タイプのアスペクト体系からは，命題Xにおける非結果相を標示する形式としてYORUが生起可能かどうかという点において相違点が観察される。これについて，A，B，Cタイプの方言は生起可能であるのに対し，Dタイプは将然相のみ，Eタイプは生起不可能である。それと並行して，D，Eタイプからは，非将然相を標示する形式としてTORUが生起可能であるという共通点が観察される。この事実より，多くの西日本諸方言が所属するA，B，Cタイプの方言は，非結果相と結果相のアスペクト対立を区別するのに対し，近畿地方以東の方言が所属するD，Eタイプの方言は，非将然相と将然相のアスペクト対立を区別するということが考えられる。これについてはさらに網羅的に方言データを収集し，検討する必要がある。

5. おわりに

本稿では，YORU，TORU，TERUを中心に，西日本諸方言におけるアスペクト体系をタイプ別に記述し，現状観察される5タイプのアスペクト体系の比較対照により，西日本諸方言のアスペクト体系におけるバリエーションの在り方について考察した。現状では，5タイプのアスペクト体系が存在しており，アスペクト対立の参照点によっては2タイプに大別できると考えられる。近畿地方以西の諸方言が非結果相と結果相のアスペクト対立を区別し，近畿地方以東の諸方言が非将然相と将然相のアスペクト対立を区別しているとすると，言語地理学的にも分析を行う必要がある。

最後に，平松 (2017)によれば，奈良県吉野郡天川村洞川方言のYORUは結果相に生起するという現象が報告されているが，同方言に対する筆者の現地調査では，YORUが結果相に生起するという現象は一切観察されなかった[16]。しかし，平松 (2017)の報告を考慮し，当該の方言を調査対象として，他の方言と同様，統一的枠組みに基づいたアスペクト体系の記述を行う必要があると考える。今後，観察される個別方言のアスペクト体系によって，西日本諸方言のアスペクト体系がさらに豊富なバリエーションを示すのかについては，引き続き網羅的に記述を続ける。

---

[15] タイプCに所属する前述の岡山県備前方言からは，高年層のアスペクト体系タイプC'>非高年層のアスペクト体系タイプCという通時的変化が観察された。タイプC'=タイプBであるため，タイプB>タイプCという体系変化のプロセスは，岡山県備前方言内の通時的変化からも支持される。

[16] 若年層，中年層，高年層から各2名の天川村洞川方言母語話者に対して行った調査結果による。

参考文献

江端義夫 (1994)「石川県石川郡美川町方言のアスペクト」『方言資料叢刊』4: 79-86.

平松美奈 (2017)「奈良県南部地域方言のシヨル系・シトル系を用いたアスペクト体系—吉野郡天川村洞川を中心に—」『日本方言研究会第 105 回研究発表会発表原稿集』（金沢歌劇座 2017 年 11 月 10 日）.

平塚雄亮 (2012)「福岡市方言のアスペクトマーカにみられる言語変化」『阪大日本語研究』24: 55-74.

五十川緑 (1984)「周防大島における「ショール」と「シチョル」の用法」『国文学 解釈と鑑賞』49(1): 118-127. 東京：至文堂.

井上文子 (1998)『日本語方言アスペクトの動態－存在型表現形式に焦点をあてて－』東京：秋山書店.

鴨井修平 (2017)「方言データから見る持続形式の意味拡張－岡山方言を中心に－」同志社大学大学院文化情報学研究科修士論文.

金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63.（金田一春彦（編）(1976)『日本語動詞のアスペクト』5-26. 東京：むぎ書房に再録）.

国立国語研究所（編）(1999)『方言文法全国地図 第 4 集 表現法編 1』東京：財務省印刷局.

工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』東京：ひつじ書房.

工藤真由美 (1999)「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」『阪大日本語研究』11: 1-17.

工藤真由美 (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京：ひつじ書房.

丹羽一彌 (2005)『日本語動詞述語の構造』東京：笠間書院.

太田有多子 (1994)「愛知県名古屋市方言のアスペクト」『方言資料叢刊』4: 135-146.

佐藤虎男 (1994)「三重県鈴鹿市白子方言のアスペクト」『方言資料叢刊』4: 147-156.

津田智史 (2014)「方言アスペクトを再考する－山口市方言のヨル・トルの表す意味－」『地域言語』22: 1-16.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy.* New York: Cornell University Press.

謝辞

本稿を執筆するにあたり，セリック・ケナン氏，外賀葵氏より多くの有益な助言を賜りました。また筆者の指導教員である沈力先生，千田俊太郎先生をはじめとする言語記述研究会の皆様より本研究への重要なご指摘を賜りました。そして多くの各方言母語話者の方々が本調査に快く協力してくださいました。ここに記して心より感謝いたします。

受理日　2020 年 4 月 15 日